



モンゴル国で初めての子どもに対する知能検査の開発 ～ アジア発達障害児支援研究 ～

名古屋大学心の発達支援研究実践センターの発達障害分野における治療教育的支援事業（野邑 健二 特任教授：チームリーダー、福元 理英 特任助教、若林 紀乃 研究員）では、モンゴル国立教育大学との共同研究で、モンゴル国における初めての標準化された知能検査を新たに開発しました。

本研究チームは、2013 年からモンゴル国において発達障害児支援研究事業を展開しています。2016 年にはモンゴル国立教育大学内に「名古屋大学モンゴル国立教育大学子ども発達共同支援センター」を開設し、モンゴル国における発達障害児支援の拠点として、実践、研究、人材育成、啓発を中心とした事業展開を行っています。

本事業の一環として2016 年より、モンゴル国立教育大学、JICA(国際協力機構)と協働で、わが国で広く使用されている知能検査である田中ビネー知能検査のモンゴル版開発を行ってきました。

知能検査の開発により、正確に子どもの状況を知ることができ、一人一人に合った教育、福祉支援を行う体制構築が行われることが期待されます。

2020 年 9 月 11 日に、知能検査モンゴル版開発とその意義を広め、検査の普及を目指した記念式典が、モンゴルと名古屋大学をオンラインで結んで行われます。

【ポイント】

- ・モンゴル国の発達障害児支援システム構築を目指した共同研究を実施しています。
- ・モンゴル国で初めてとなる子どもに対する知能検査モンゴル版を開発しました。
- ・2020 年 9 月 11 日に、知能検査モンゴル版開発記念式典を、モンゴルと名古屋大学をオンラインで結んで開催します。

【研究背景と内容】

モンゴル国では、特別支援教育や発達障害児支援を行うシステムが整備されていません。発達障害を診断できる専門医は極めて少なく、発達支援を行うことのできる専門的な人材も限られています。加えて、子どもの発達を支援する上で最も重要な情報のひとつである知能を測るツールが開発されていませんでした。

本研究チームは、2016年からモンゴル国立教育大学、JICAと協力し、モンゴル国の子どもに合った知能検査を開発するための事業を行ってきました。わが国で用いられている田中ビネー知能検査を元に、モンゴル国の文化や教育に合った検査を作成し、3度の改定と延べ約1200名の子どもへの検査を行いました。その結果をもとに検査の標準化を行い、モンゴル国の子どもたちに適応できる知能検査を開発することができました。

今回、検査の開発とその意義を広め、検査の普及を目指して、9月11日にモンゴル国と名古屋大学をオンラインで結んだ式典が行われます。

今後、検査を適切に利用して子どもの発達支援に生かすことのできる人材養成のための研修カリキュラムの構築と実施体制の普及を行っていきます。



【成果の意義】

モンゴル国では近年発達障害に対する認識が広がってきており、支援に対するニーズは高まっていますが、専門知識、人材、ツールを含めた支援体制は十分とは言えません。

今回開発された知能検査を用いることで、子どもの発達に関して、適切なアセスメントに基づいた支援を行うことが可能となり、同国の教育、医療、福祉、行政等における子ども発達支援システムを構築する上で非常に大きな意義があると考えられます。

【用語説明】

発達障害：自閉スペクトラム症、学習障害、注意欠如多動性障害、その他これに類する脳機能障害であってその症状が通常低年齢において発現するものです。注意集中が弱い、衝動的になりやすい、落ち着きがない、人付き合いがうまくいかない、こだわりが強いなどの特性がみられます。目に見える障害と違い、気づかれにくいことも多く、不適応を起こすことで二次的な心理的問題を併発することが問題となりやすいです。いじめや不登校、学級崩壊の要因となることもあり、特性にあった支援が必要とされています。